

高尾城跡（コジョウ地区）現地説明会資料

令和5年7月1日（土） 金沢市埋蔵文化財センター

1. 調査概要

高尾城は標高約 186m の富樫丘陵先端部一帯に築かれた山城です。浄土真宗門徒による長享2年(1488)の一向一揆(長享の一揆)の際に加賀国守護・富樫政親がこの城に立てこもり、一揆軍に攻め落とされたことで、加賀が「百姓ノ持チタル国ノヤ(ヨ)ウ」となる歴史的事件の発端となりました。金沢の歴史を語る上で欠かせない遺跡として広く知られています。

城跡は「ジョウヤマ」と「コジョウ」と呼ばれる地区にあります。「ジョウヤマ」地区にあった城の主要部分は過去の土取りにより失われてしまいましたが、「ジョウヤマ」の背後にあって細尾根で結ばれている「コジョウ」地区には城郭遺構が多数残されています。

調査目的	「コジョウ」地区に残る遺構について、発掘調査により当時の規模や形を明らかにし、出土品の年代を手がかりに高尾城跡の歴史的変遷を探ります。
調査期間	令和5年5月30日～令和5年7月初旬(予定)
調査地	金沢市高尾町地内(4箇所計約50㎡)
主な遺構	中世：堀切、切岸、主郭・曲輪(平坦面)、集石土坑
主な遺物	中世：渡来銭(熙寧元宝)、土師器皿、珠洲焼すり鉢、古瀬戸平碗



高尾城跡（コジョウ地区）の位置

【用語解説】

曲輪（くるわ）	尾根や斜面を造成した平坦面で、土るい・切岸・堀などで区画された区域
主郭（しゅかく）	城の中で中心になる曲輪で、近世城郭の本丸にあたる場所
堀切（ほりきり）	尾根を伝って進入する敵を防ぐため、尾根を断ち切り空堀としたもの
切岸（きりぎし）	斜面下からの敵の侵入を防ぐため、斜面を削って急傾斜の断崖としたもの
豎堀（たてぼり）	斜面に対して縦方向に溝状の堀を掘り敵の横移動を防いだもの。豎堀を連続して並べたものを畝状豎堀（うねじょうたてぼり）と呼ぶ

2. 高尾城跡（コジョウ地区）の遺構と調査位置

コジョウ地区には主郭、4箇所の堀切、帯郭、畝状縦堀群が知られています。そのうち、主郭に2箇所と東外堀切・南堀切に各1箇所、計4箇所に幅1～1.5mの調査区を設定しました。



高尾城跡（コジョウ地区）の遺構と調査位置

3. 発掘調査成果

◆主郭（調査区 1・2）

・ ^{とらいせん}渡来銭 ^{きねいげんぼう}「熙寧元寶」と ^{はじきざら}中世の陶器や土師器皿が出土

概 要 主郭は標高約 186m の小高い丘陵を頂点とするコジョウ地区の最高所で、頂上付近には約 500 m² の平坦面(主郭上段)が広がっています。主郭の北東側および南東側では、一段下がった位置で標高 180m 付近まで緩やかな斜面(主郭下段)が続きます。

主郭北西部の上段から下段にかけて掘削した調査区Ⅰでは、上段の地表下約 20cm で中国製の渡来銭「熙寧元寶」が出土しました。「熙寧元寶」は 1068 年から鑄造された中国北宋の貨幣です。中国の貨幣は貿易により輸入され、渡来銭として国内で広く流通していました。

上段では土坑や柱穴等の明確な遺構が確認されなかったため、やや地質が硬化する地表下約40cmまで掘り下げたところ、礎石のような上面が平坦な石が検出されました。そのため周囲を拡張して掘削しましたが、この石に続く礎石列は確認されませんでした。

主郭上段から主郭下段にかけては、現在、比高差約 3 m の緩斜面となっていますが、発掘調査の結果、主郭上段と主郭下段の間が比高差約 2.2m、最大角度約 65 度の急な斜面（切

岸) となっていることと切岸下の下段は高低差約 50cm の二段の平坦面で構成されていることが判明しました。

下段平坦面のくぼ地には人頭大の川原石が多数集積されていました。集石の周囲から出土した土師器皿や古瀬戸平碗の年代から、14 世紀末～15 世紀前半代にこの集石が置かれたくぼ地が掘られたことがわかりました。また、集石より上層では 14 世紀末～15 世紀後半代の珠洲焼すり鉢や 15 世紀末～16 世紀代の土師器皿細片がみつかっています。

主郭北東部では下段緩斜面に調査区 2 を設定しました。発掘の結果、緩斜面裾部は自然地形の斜面に盛り土をおこない平坦面を造成していることが明らかになりました。

◆堀切（調査区 3・4）

・現地表面より 1 m 以上深い位置で堀底を確認

→ 想定よりも大規模な造成が行われていたことを初めて確認しました
城として高い防御力を有していたことが判明しました

① 東外堀切

概要 高尾城跡東面を流れる城谷川から主郭へ登る稜線を断ち切るように掘られた南北方向の 2 本の堀切(東外堀切・東内堀切)のうち、東外堀切は幅約 15m、長さ約 50m、深さ約 8m を測り、コジョウ地区で最も大規模な堀切です。

東外堀切の底を掘削したところ(調査区 3)、堀底は平坦で堀底幅は約 2.7m となっており、現在まで堀底に 1.8m の土砂が堆積していることが判明しました。堀切の外側では固い砂層を約 50 度の傾斜で削り出した切岸の斜面となっていることを確認しました。

② 南堀切

概要 コジョウ地区の南(搦手)側稜線を断ち切るために掘られた東西方向の堀切で、幅約 20m、長さ約 35m、深さ約 6m を測ります。

調査区 4 では堀切の一部が南北方向に造成された造林作業道により約 1m の厚さの盛土で埋められていますが、堀切遺構は比較的良好に残っていることを確認しました。堀底の断面形状は丸く、調査区内では堀幅約 5.5m までを確認しました。造林作業道で埋められる前の旧表土から堀の最深部までは約 1.2m の土砂が堆積していました。なお、堀外側斜面の傾斜は最大約 50 度、堀内側斜面の傾斜は最大約 30 度でした。

5. 発掘調査でわかってきたこと

- ① 高尾城(コジョウ地区)には、主郭、曲輪(平坦地)、切岸、大規模な堀切等が良好に残されており、中世城郭の実態を知ることができる貴重な遺跡であることが判明しました。
- ② 出土品によりコジョウ地区の遺構の築造が富樫氏の時代の 14 世紀後半代には始まっていたことを確認しました。
- ③ 少数の細片のため詳細はわかりませんが、15 世紀後半～16 世紀代と考えられる遺物が出土したことから、長享 2 年(1488)の一向一揆の際にもここが城として利用された可能性があります。

主郭(調査区 1) 上段



主郭上段の平坦面

主郭(調査区 1) 下段



主郭下段は二段の平坦面で構成される
東外堀切(調査区 3)



東外堀切 現地表下 1.8m ほど埋まる
南堀切(調査区 4)



南堀切 旧地表下 1.2m ほど埋まる



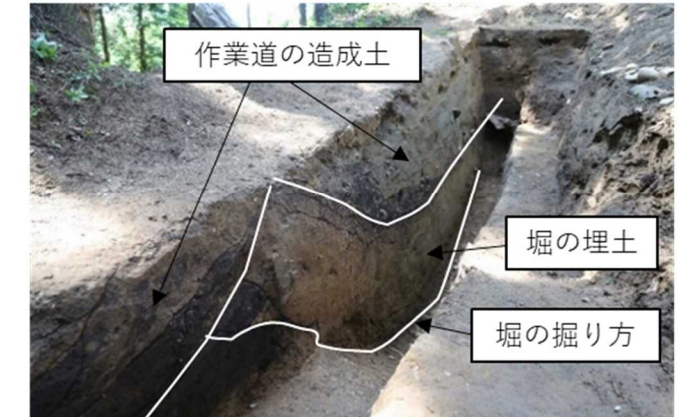
主郭(調査区 1) 出土遺物



下段のくぼ地に人頭大の川原石を集積



東外堀切 埋土はほぼ均質な山砂



南堀切 土層堆積状況